

## 公開研究会「『家庭』をフィールドとして研究すること」の開催

2022年10月9日（日）に、子ども発達臨床研究センターおよび日本発達心理学会北海道地区懇話会共催で、掲題の研究会が対面にて開催された（参加者14名）。

現代の日本社会に暮らす子どもの発達過程を明らかにするには、その生活環境やそこで  
の諸実践を、発達理論にどのように組み込むかが重要な課題となる。

乳幼児期・児童期の子どもの主たる生活環境は、家庭である。それぞれの家庭において養  
育者は育児のための環境を組織するという実践にたずさわる。さらに、子ども自身もそ  
での育児実践に固有なやりかたで寄与している（伊藤, 2020）。

ここから、発達研究においては、家庭内の環境や諸実践を具体的に記述することが求めら  
れる。一方で、従来の多くの発達研究は、家族に「家庭内での生活のパターン」を想起させ、  
自己報告させて得られたデータを生活環境や諸実践を示すものとして扱ってきた。裏を返  
せば、研究者は家庭内で生活する子どもを見てこなかったのである。

近年、家庭での家族の生活を観察し、その実態について具体的に明らかにする研究が増え  
つつある（例えば、是永・富田（編）, 2021; Korenaga et al., 2021; Ochs & Kremer-Sadlik,  
2013）。また、そのための方法を検討した研究も現れ始めている（金南ら, 2021; Lareau &  
Rao, 2020）。こうした潮流は今後も続くだろう。

家庭はプライベートな空間であることから、そこに研究者が入り込み、観察することが避  
けられてきたのは事実であろう。しかし、研究の目的によっては家庭内の観察を実施する  
ことが不可欠な場合もある。それはどのような目的か。また、家庭内に参与する際の具体的  
な方法とは何か。

本企画では家庭というフィールドの観察を行った研究者から話を聞くことを目的とした。  
それを通して、これまで極めて重要でありながら顧みられることがなかった家庭というフ  
ィールドへのアプローチの仕方が明らかになる。さらに、そこでの観察を通して明らかにな  
った重要な発見についても議論される。

さらに、調査に協力した家族にもご登壇いただいた。研究者が企画した研究に協力者とし  
て参加するということはどのような経験なのか。研究者からの一方的な見え方だけでなく、  
協力者からの研究者の見え方も同時に示すことにより、共同的な知の構築が期待される。

当日は、企画者の伊藤崇（北海道大学）の他、志田未来（日本女子大学）・是永論（立教  
大学）の各氏から、研究者が家庭内に入って実施された研究報告がなされた。さらに、鶴川  
貴子（公立中学校）・鶴川護（香川大学教育学部附属高松小学校）・富田晃夫（株式会社ミサ  
ワホーム総合研究所）の各氏からは小中学生の電子デバイス利用状況や家づくりについて  
情報提供いただいたほか、調査対象として研究者と協働することについて発表いただいた。